日本医史学雑誌第二十八巻三号
昭和五十七年七月三十日発行

昭和五十六年九月二十八日受付

御雇解剖学教師ギールケとディッセ（一）

小関恒雄

1

東京医学校解剖学教師ウイルヘルム・デーニッツの後任として、ハンス・ギールケ（Hans Paul Bernhard Gierke, 1847—1886）が明治十年三月（一八七七）着任する。その後任はヨゼフ・ディッセ（Joseph Hugo Vincenz Disse, 1852—1912）で、明治十三年二月（一八八〇）から二十年五月（一八八七）までである。同校が東京大学医学部から帝国大学医科大学へと脱皮してゆく時期に当り、デーニッツはもちろんながら、彼らが日本の解剖学(者)を自立させた功績は大きい。[1]

このたび、両氏のそれぞれ解剖学テキストを調べる機会を得たので、以下報告する。

2

ギールケのテキストは Anatomische Vorträge, Tokio, 1878—79 であり[2]（図1）、その構成はつぎのとおりである。

Bänder- und Gelenk-Lehre. Syndesmologie und Arthrologie.

Einleitung (8 p.)

Capitel I-IV. Kopf, Thorax, etc. (67 p.)

Muskellehre. Myologie.

Allgemeine Einleitung (16 p.)

Die Schädelmuskel, Vordere Halsmuskeln, Tiefe Halsmuskeln, etc. (175 p.)

Gefaesslehre. Angiologie.

Einleitung (8 p.)

Capitel I-V. Das Herz. Cor; Die Arterien oder Schlagadern, etc. (183 p.)

I Theil. Allgemeine Anatomie

I-XI Capitel. (I-II: Einleitung, III-XI: Die Gewebe) (109 p.)

Eingeweidelehre. Splanchnologie.

Einleitung (1 p.)

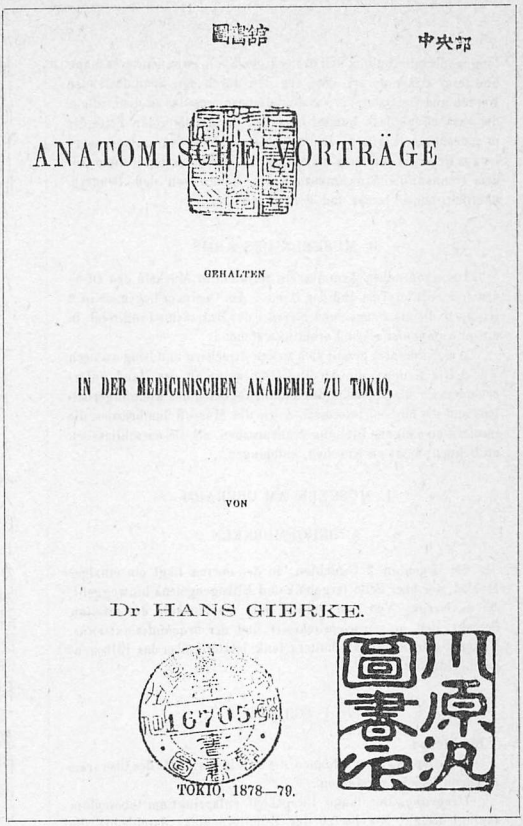
Capitel I-III. Der Verdauungstractus und seine Drüsen, Der Respirationstractus oder das System der Athmungsorgane, Die Blutgefässdrüsen (138 p.<)

Sinnesorgane (?)

Einleitung, Die Haut mit dem Tastsinn, Das Seh-Organ,…… (62 p.<)

以上、計七六七頁あまりのテキストであり、図は入っていない。内容は靱帯関節学、筋学、脈管学、解剖（組織）学総論、内臓学、感覚器学（一部）である。ギールケの在任は一八七七～八〇年の間であるから、このテキスト（一八七八～七九）は彼の講義（録）の一部と考えられる。[3] テキストはこれらの他、前後が刊行されたのか否か、管見しえなかった。

デーニッツが警視庁に去ったあと、田口和美が明治九年七月（一八七六）より「解剖学教授欠員中凡六箇月間外国教授


中央部 圖書館

ANATOMISCHE VORTRÄGE

GEHALTEN

IN DER MEDICINISCHEN AKADEMIE ZU TOKIO,

VON

Dr HANS GIERKE.

TOKIO, 1878—79.

16705

図1　ギールケ著 Anatomische Vorträge トビラ

ノ代理ヲ負担」[3]した。そしてようやく「ウルツブルヒ府大学校之助教」[4]ギールケが明治十年三月（一八七七）着任する。いつから講義が始まったのか「ギールケ氏病ニ由テ申報ヲ製スルコト能ハス」[5]と、はっきりしないが、前述のごとく、代講していた田口和美を引継いだのであろう。「明治十年夏半期学科表」（六～一一月）には、五等本科生（一年生）「解剖演習」週六時間、「組織学」四時間、四等本科生（二年生）「組織学演習」三時間となっている。[5]しかし実際は四等本科生に「（明治一〇年）十二月迄ハ骨論靱帯論筋論組織学総論ヲ講述セリ」「此四科教授ノ為メニ毎週六時間」を費したという。[3]

明治十年十二月より十一年十一月までの一年間（冬、夏半期）にギールケは、五等本科生に「解剖学」（冬半期週七時間、夏半期六時間）、「組織学」（夏、三時間）、「顕微鏡用法」（夏、二時間）を、四等本科生に「解剖演習」（冬、一八時間）、「五感機解剖学」（夏、二時間）を、一、二等本科生に「外科解剖学」それに「外科学」（シュルツェ帰国中）をも担当している（冬、各二時間）。ある時間などは講義をしつつ他の学年に演習をやらせることもやっている。彼は「生徒ノ需メニ応シテ備忘録ヲ上梓シ各自ニ一部ヲ持タ」せた。「此備忘録ヲ製スルニ大ニ尽力シ殆ト全放課時間ヲ費セリ是レ本部ニ完全ナ

ル解剖教授書ナキ」ためという。[3] この「備忘録」が前述テキストを指すことは間違いあるまい。彼は解剖学（理論）をほぼ骨論靱帯論筋論臓腑論器管系統及神経系統の順で講義したのであるから、前述テキストの順序とは大体合うが、骨論および神経系統が欠けている。

明治十一年十二月より十二年十一月に至る年度はようやく授業が軌道に乗る。五等本科生は冬半期、夏半期一カ年で骨論靱帯論筋論臓腑論組織学総論を、次年度（四等本科生）冬学期で「余ス所ノ部」と「実地演習」を、同夏学期で「顕微鏡用法」を、すなわち解剖学組織学を二年間で終了する。[6]

なおギールケの原著テキストは管見しえないが、田口和美が編纂した『人体組織攬要』（一八八〇～八四）がある。ギールケの帰国直後出版しだしたものであり、たぶん田口が別課医学科で教科書に使ったものであろう。同学科の「解剖学及組織学」教科要目[7]によれば「此二学（解剖、組織）ニ用フル教科書ハ教授田口和美著解剖攬要及人体組織攬要ノ二書」であると述べている。『人体組織攬要』は「ギールケ氏ノ撰述セル組織学ノ備忘録及同国刊行ノ新著ニ係ル組織書等ヨリ最モ研学ニ喫緊ナル条項ヲ抄訳」したものである。

本書の内容はつぎのとおりである。

7

longus; derselbe halbirt den dreieckigen Spalt zwischen teres major und teres minor derart, dass von den durch den Spalt tretenden Nerven und Gefässen, die vasa circumflexa scapulae an die mediale, die vasa circumflexa humeri hingegen an die lateralen Seite des m. anconaeus longus zu liegen kommen. Vor dem m. anconaeus longus liegt der m. teres major und der latssimus dorsi; diese beiden trennen die Streckmuskeln des Armes von den Beugern, nämlich vom m. biceps und coracobrachialis.

B. MUSKELN DES ARMS.

Die eigentlichen Armmuskeln zerfallen in Muskeln des Oberarms, des Unterarms und der Hand. Am Oberarm liegen sie in 2 Gruppen, die als *Beuger* und *Strecker* des Unterarms fungirend, in einem *antagonistischen* Verhältniss stehen.

Am Vorderarm gesellt sich zu den Streckern und Beugern noch eine dritte Gruppe, die der Radialmuskeln; an der Hand unterscheiden wir die Muskeln des Daumenballens, des Kleinfingerballens und die Musculi interossei, sowie die Musculi lumbricales, die insofern eine eigene Stellung beanspruchen, als sie ausschliesslich an Sehnen, nicht an Knochen, entspingen.

I. MUSKELN AM OBERARM.

A. BEUGEMUSKELN.

Sie liegen in 2 Schichten; in der oberen liegt ein einziger Muskel, der über Schultergelenk und Ellbogengelenk hinweggeht, der *m. biceps*. Von ihm bedeckt sind die Muskeln der zweiten Schicht, der *m. coraco-brachialis* und der *brachialis internus*. Ersterer geht über das Schultergelenk, letzterer über das Ellbogengelenk hinweg.

1. SCHICHT.

M. biceps.

Er entspringt mit 2 Köpfen, die sich in der Mitte des Oberarms zu einem Bauche vereinigen.

Ursprung. Der lange Bicepskopf entspringt am tuberculum supraglenoidale, durchsetzt das Schultergelenk, durchbohrt die

2

図 2　ディッセ著　Grundriss der Anatomie des Menschen（本文 7 頁）

序論
細胞及細胞ノ性質
細胞ノ身体ヲ結構スル為ニ受クル所ノ変化
第一編　組織
（第一章上皮　第二章血液、淋巴液及乳糜　第三章結締質及結締組織、弾力組織、脂肪組織　第四章軟骨組織　第五章骨組織　第六章筋組織　第七章神経組織　第八章腺組織　第九章歯組織　附録血管及淋巴管）
第二編　器臓論
（第一章消食器　第二章呼吸器　第三章溺器　第四章生殖器）[8]
附図（第一～第二百五十五図）

なお本書は同氏『解剖攬要』とともに当時の医学校で講本に用いられたりした好著である。[9・10] ちなみに当時流布していた教科書（原書）はイ　ヘンレー（J. Henle）、クラウビ、クェン（J. Quain）の解剖学書、キョルリケル（A. Koelliker）、ストリッケル（S. Stricker）、フライ（H. Frey）の組織学書などであったという。[7] 阿知波[11]は当時の教科書を詳細に論じている。

本書がギールケの「備忘録」を基にしているなら、彼が準拠したであろう教科書がわかるはずである。すると本書はフライ、[12・13] ケリケル[14]などの組織学書から図解の大半を模写しているので、たぶんギールケはこれら教科書を参考にしたのではあるまいか。（ちなみに彼は Würzburg のケリケルの助手をしていたとき、師の推薦で来日したのである。）

ギールケは明治十三年三月（一八八〇）雇満期となるが、同年五月まで雇継される。[15] 結局、学期半ばで帰国する。彼は病気勝ちであったようである。[16]

3

ギールケが更迭されることになり、早々とディッセ（ストラスブルク大学解剖学助手）が招かれる。（明治一三年二月二七日）。

ディッセは明治十三年三月（一八八〇）より講義を開始する。[17] 五等本科生に「筋論及ヒ臓腑論ノ初篇〔消化器〕其他」、四等本科生には「解剖学実地演習」を教える。夏半期（同年六月より）は五等本科生に「呼吸器尿器生殖器脈管血脈管腺及ヒ神経系統中枢器」、その他「解剖汎論」を、四等五等本科生には「顕微鏡学」を教える。学科表によれば、冬半期（明治一二年一二月～一三年五月）はギールケ担当で「解剖学」を五等本科生に週十二時間、四等本科生に週十八時間となっている。（前記のごとく実際はディッセが十三年三月から替っている。）以降夏半期は五等本科生が「解剖学総論」週二時間、「解剖学」五時間、「組織学」五時間、四等本科生は「顕微鏡用法」一時間、「顕微鏡実地演習」四時間となっている。

ディッセもまた明治十五年テキスト Grundriss der Anatomie des Menschen, 1882[18] を印刷している（図2）。管見しえたのは（もちろん一部なのであろうが）筋学の部分で、つぎのような内容である。

Einleitung（7p. 手書き）[19]

Muskeln des Arms（p. 7-20）

Brustmuskeln（p. 21-22）

Bauchmuskeln（p. 22-32）

Rückenmuskeln（p. 33-39）

Muskeln der unteren Extremität（p. 39-54）

これら活字頁の前後、中間に随所白紙をはさめ、書入れがしてある。[19]

明治十三年冬学期より十四年十一月に至るディッセの申報はつぎのようである。[20] 四等学生には冬学期「解剖学実地演習」および「胎生学汎論及胎生学各論」「神経解剖学及五官器解剖論理」を、夏学期は「顕微鏡学実地」を教える。五等学生には冬学期に「系統解剖学ノ前編即チ骨学靱帯学筋学及内臓学」、夏学期には同後編「生殖器学脈管学及神経学」その他「普通解剖学」を教えた。

すなわち「解剖学科ノ区域頗ル広濶ナルヲ以テ」二年を要し、「前一ケ年ハ主トシテ理論ト実験トヲ教導シ学生ヲシテ勉テ研学ノ針路ヲ知ラシメ后一カ年ハ既ニ通暁シタル所ノモノヲ能ク温習シ勉テ実際ニ渉リ解剖学究蘊ノ方法ヲ知ラシム」。この年度の医学本科生学科表でみると、冬学期は五等本科生に週「解剖学」六時間、「解剖学実地演習」十二時間、四等本科生に「胎生学」六時間、夏学期は五等本科生に「解剖学」十二時間、四等本科生に「顕微鏡用法」五時間となっている。[20]

明治十四年一～二月は「沍寒酷烈近年ニ稀ナルニ会ヒ」、いままでなかなか作れなかった「人体ノ凍製縦断及横断面」標本を田口和美や今田束らと作製した。[20]

明治十五年（一八八二）になると「局處解剖学」が設けられる。詳細はわからないが、学科表には第一年（五等学生）は冬夏学期「解剖学」、第二年（四等学生）は冬「解剖実地演習」、夏「実地組織学」、第四、第五年（二等、一等学生）には冬夏学期「局處解剖学」となっている。[21]

4

やがて小金井良精（明治一三年留学）が明治十八年（一八八五）帰朝し、同年九月より解剖学を担当する。[22] ディッセは引

続き「局所解剖学」を分担するが、「病理学病体解剖学組織学」[23]担当となる。いままで病理学はベルツ兼担だったが、ディッセが初代病理学専任教師となる。[24]ここでの主な仕事が田口和美との「黴毒ノ伝染毒論」[25]という一大論文となる。

ディッセは明治二十年五月二十六日（一八八七）満期解雇となり、同月二十八日、学術取調のため渡欧する田口和美らと一緒に出航帰国する（中外医事新報一七三号一八八七）。すでに東京大学医学部は帝国大学医科大学と改称され（一八八六）、変貌をとげてゆく。

おわりに

わが国に専門教師による解剖学の講義が始まったのはW・デーニッツによる東京医学校（明治六～九年）のそれであるが、講義等の詳細は不明であり、間接的に田口和美『解剖攬要』（一八七七～八二）や奈良坂源一郎『解剖大全』（一八八三）で窺えるにすぎない。

デーニッツの後任ギールケ（明治一〇～一三年）、その後任ディッセ（明治一三～二〇年）の講義について、彼らがそれぞれ編んだテキストおよび教授申報に基づいて、概要を述べた。

これらドイツ人教師による授業は、田口和美、今田束らが補佐し、やがて小金井良精（明治一八年）により引継がれてゆく。

小川鼎三先生の御校閲に深謝する。また、いろいろ御便宜をいただいた国立国会図書館、金沢大学、名古屋大学その他多くの図書館関係各位にお礼申しあげる。

文献および註

(1) 石橋長英・小川鼎三、『お雇い外国人 (9)医学』、鹿島出版会、一九六九。

(2) 管見しえたのは木村孝蔵、川原汎（邦太郎）各旧蔵本である。彼らは明治十年ごろ五等本科生であったから、ギールケに直接習ったときのテキストであろうか（「東京大学医学部一覧」明治十年）。

(3) 「東京大学医学部第五年報」（明治一〇年一二月～一一年一一月）、一八七九。

(4) 東京大学医学部「外国教師一切之件」（明治十年）。

(5) 「東京大学医学部第四年報」（明治九年一二月～一〇年一一月）、一八七八。

(6) 「東京大学医学部第六年報」（明治一一年一二月～一二年一一月）、一八八〇。

(7) 「東京大学医学部一覧」（明治一四、一五年）、一八八二。

(8) なお本書凡例によれば、（第四章生殖器に続き）血管腺、神経系統ノ中枢部及五官器が続く、とある。

(9) 小川鼎三、「明治前日本解剖学史」、日本学術振興会、一九五五。

(10) 『金沢大学医学部百年史』、金沢大学医学部創立百年記念会、一九七二。

(11) 阿知波五郎、幕末明治初期（一八四〇―一八八七）解剖学書（内、外）目録について、日本医史学雑誌、二二巻、二一五―二三六頁、一九七六。

(12) Frey, H.: Grundzüge der Histologie zur Einleitung in das Studium Derselben, W. Engelmann, Leipzig, 1875.

(13) Frey, H.: Handbuch der Histologie und Histochemie des Menschen, 5. Aufl., W. Engelmann, Leipzig, 1876.

(14) Koelliker, A.: Handbuch der Gewebelehre des Menschen, W. Engelmann, Leipzig,（実見: 7. Aufl., 1889-1902).

(15) 明治十三年三月三日ギールケは「傭期既ニ満チ代員ヂスセ氏ノ来着アリト雖学期ノ半バニ於テ解傭スルハ授業上ニ支障アルヲ以テ五月三十一日マテ在任ヲ約ス」[16]。

(16) 『ベルツの日記』（明治一三年六月二二日）には「ギールケは上品で、すこぶる熱意のある人物だが、惜いかな常に病身である。この理由で日本当局も、かれには無断で、別の人間（ディッセ）を雇入れた」とある。

(17) 「東京大学医学部第七年報」（明治一二年一二月～一三年一一月）、一八八一。

(18) ディッセにはこれと同題の著書（一八九二年刊）があるというが、管見しえなかった。

(19) 金沢大学所蔵のものは、佐々木達（帝国大学医科大学、明治二一年卒）旧蔵本である。手書きの部分は常識的には旧蔵者が書

いたと考えられるが、もちろん断定はできない。佐々木は明治十六年ごろ本科に進んだから、そのころのディッセのテキストであろうか。

(20) 「東京大学第一年報」(明治一三年九月～一四年一二月)、一八八二。

(21) 「東京大学第三年報」(明治一五年九月～一六年一二月)、一八八四。

(22) 小金井良精、東京帝国大学医科大学解剖学教室略誌附一図、東京医学会創立廿五年祝賀論文、第一輯、七一二七頁、一九一二。

(23) 「帝国大学一覧」(明治一九、二〇年)、一八八六。

(24) 東京帝国大学医学部病理学教室、『東京帝国大学病理学教室五十年史』上巻、一九三九。

(25) Disse, J. u. Taguchi, K.: Das Contagium der Syphilis, Mitt. med. Fac. kaiserl.-japon. Univ., 1: 1-87, Tafel I-XII, 1887; Disse, J.: ditto., Dtsch. med. Wo., 13: 888-889, 1887.

(新潟大学医学部)

Hans Gierke and Joseph Disse; Foreign Teachers of Anatomy at Tokyo University Early in the Meiji Era (Part 1)

by

Tsuneo KOSEKI

As a successor to Wilhelm Dönitz, professor of anatomy in Tokyo University, Hans Gierke who was an anatomy assistant at Würzburg University was chosen in 1877. He lectured on anatomy and histology at the Tokyo School, then published an anatomical textbook, "Anatomische Vorträge" in 1878 to 1879 (Fig. 1). His lecture notes on histology were translated by the teaching staff of Tokyo

University, Kazuyoshi Taguchi.

In 1880 Joseph Disse, an assistant anatomist at Strasbourg University was elected as successor to Dr. Gierke. He slso issued a transcript of his lectures on anatomy, "Grundriss der Anatomie des Menschen" in 1822 (Fig. 2). He left Japan in 1887.

Those textbooks were of great help in the progress of anatomical science in this country.